令和５年９月６日

長岡京市長　中 小 路 健 吾　様

八条が丘自治会長　八 木 仁 美

八条が丘自治会の全員を会員と見なした取り組みについて（報告）

平素は、自治会活動にご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。
標記の件について、現在の取組状況を下記のとおり報告いたします。
ジチカツ（自治活動）の参考としていただけると幸いです。

記

１．取組内容

令和５年度から、地域全員が会員とみなして地域に貢献する活動を行うことに変更しました。
具体的には「たすつなびと」を増やす活動を実施。
「たすつなびと」とは、仲間（住民）のために「助け合いとつながりのまちづくり」の行動をする人・応援する人・広める人です。

（１）収入の変更点とその結果

①ジチカツ協力金

会費をジチカツ協力金に変更しました。協力金は任意とし、協力金を支払った世帯、支払わない世帯の区別をすることなく、地域内のすべての人に向けたジチカツを行う費用に充てることを記して支払いをお願いしました。
（別添、お願い文書参照）
支払いは、１世帯２千円以上を持参や振込の方法でお願いし、役員が会費を徴収する負担を無くしました。
協力金をいただいた世帯へ、返礼品を用意しました。ふるさと納税をヒントにしました。（返礼品は、長岡京市指定ごみ袋 30 ﾘｯﾄﾙと手提げつき 7 ﾘｯﾄﾙ。金額にして、概ね１割の返礼）

協力金の結果、８月末現在、約２２０世帯から協力を得られています。
（集計中。会員として計算すると前年度約２割減）
世帯当たり２千円以上としてお願いしたところ、３千円・５千円協力してくださる方が増えました。今まで頑なに会員とならないと宣言されていた世帯から協力を得られたことが印象に残っています。
ジチカツ持参デーを設けたところ、３４人が持参され、今まで会員で無かった人も応援してくださいました。その場で、様々な会話をすることができました。持参デーでは、今回の取組について、前向きな意見をいただきました。

②イベント協賛金

イベントは、参加した人、しなかった人の負担感を調整するため、無料のイベントを極力なくし、開催時に参加者から数百円程度の協賛金を徴収することにしました。

恒例の夏まつりでは、大人の方から 300 円徴収しました。今のところ、参加者から不満の声を聞いていません。

（２）活動内容の変更点

イベントは、本会役員だけが準備・開催するのでなく、子どもや高齢者、地域内外の人が活動に参画できることにしました。

多世代交流を目的として活動している「ふれまち八条が丘」では、かねてから長岡京市社会福祉協議会の応援を得ながら、地域外の福祉事業者と連携した取組を行っており、今年度から実施した月１回のサロンでは、長岡中学校美術部も参加し、子ども達と高齢者が一緒になって取り組んでいます。

秋のガラシャ祭りでは、子ども達が作ったみこしで巡行する予定をしています。

恒例の夏まつりでは、地域の子ども達が綿菓子を提供したり、西山短期大学の学生に応援していただきました。

敬老のお祝いの配布は、地域内の高齢者（７０歳以上）全員を対象に配付することにし、現在、準備をしています。個人情報の課題もあり、当初は、昨年会員だった方へプレゼントし、対象者から申し出いただく方法を採る予定です。

２．変更の動機と経過

（１）変更の動機

ジチカツは、地域の課題を地域の人々が協力しあって解決していくための活動です。

しかし実体は、自治会費を負担した者だけに課題の解決を担わされ、会費を負担していない者は、解決による恩恵だけを享受するという矛盾が生じています。

会員には会費の負担に見合ったサービスの提供を要求され、要求に答えるため役員の負担が増え、活動が苦痛となり、本会会員でなければ煩わしい役員になることはなく、気づいた者から退会していく現象が生じていました。

本来、必要なコミュニティが、会員で「ある」「なし」によって分断されていました。令和５年度から、この状況を変えることにしました。

（２）変更に至った経過

①過去５年間の活動

会長を引き受けて５年間、「サッパリだけど、ドップリでない絆」を築く活動を実践し、特に、コロナ渦で活動を抑制した期間は、長岡京市社会福祉協議会等と相談して、多世代交流のため「ふれまち八条が丘」を立ち上げ、様々なジチカツを地域の方と一緒に取り組んできました。

しかし、平成３０年４月１日時点で、自治会加入数２９７世帯（総数４８２世帯)、加入率６１．６％だった本会も、令和５年４月１日現在、同２６７世帯

（総数４８０世帯）加入率５５．６％まで減少しました。

コロナ禍では、行事ができなくなったため、会費を半額にして出来る活動を工夫して、顔の見える関係性づくりを行って来ました。気づかされたことは、当時の役員と会員と半額にするための会費の話をした際のこと。

「例えば、会費をゼロにしたとき、会員になるか？」

役員会で話し合いました。

「ゼロでも会員であれば役員が回って来る。それがいやだから入会しない。役員を引き受けなくてよいなら、会費を多くはらってもよい。」

本音であろうと思いました。それくらいジチカツが負担になっている。楽しくない。イヤイヤやっているのです。

このまま会員の公共心にだけ頼る活動では、本会を継続することは困難で、あまり意味がないと思いました。

ほかに、会費をお願いに各世帯へ回るのがストレスで、日ごろは声を掛け合い、仲良くしているのに、会費の支払いに伺うと、イヤな顔をされてしまう。

自治会も５０年を超え、自治会に入ってなかった親のもとで育った子の世代になりました。活動への理解がますますなくなってしまったと嘆く声も聴くようになりました。

②子ども会の休止

本地域の子ども会も本会と同様の課題を持っていました。

入会数の減、役員負担の増などに対応するため、工夫しながら様々な取組を行っていましたが、負のスパイラルから脱却できず、何より会員で「ある」「なし」という親の都合によって子ども同士が分断されるという、本来あるべき姿でなくなって、本会に先んじて、子ども会の活動は、令和４年度をもって休会を決断し、会費の負担のない多世代が交流する「ふれまち八条が丘」へ引き継ぐことになりました。

子ども会が本会の下部関連組織であったため、子ども会の休止について、本会の議決案件として扱い、役員会において話し合いを進めていく中、会員で「ある」「なし」がジチカツに、本当に必要なものなのか、どうか、本来必要な活動は何か、深く考えることができました。

③自主防災会の気づき

八条が丘自治会長は、八条が丘自主防災会の会長を兼ねています。同じく、その他の役員も自治会と自主防災会の役員を兼ねています。

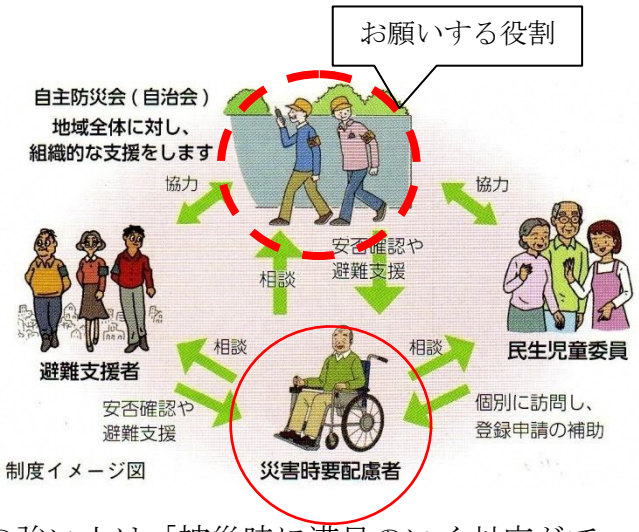
自主防災会の活動は、有事に他者のため活動する任を担います。

その対象は自治会員で「ある」「なし」に捉われません。何かあれば、会費を負担した者が、会員でない者を助けことに。活動費は自治会費で賄っています。

結局、会員だけが損をしているようにとられます。

本来、全員が担う活動なのに。

「災害時にともに助けあう制度」
役員に、災害発生時に避難所までの誘導等の支援をお願いしています。
要配慮者の個人情報の取り扱いと共に
「災害時は誰もが被災者ですので、支援にあたる方が責任を負うものではありません」
と説明しています。



制度イメージ図

役員の中には、役員自身が要配慮に当たる方もおられ、また、責任感の強い人は「被災時に満足のいく対応ができない」と述べられます。
役員を引き受けたために、知りたくない情報と役割を背負わされ、役員の負担感を増加させる要因になっています。

④民生委員を兼ねたことによる気づき
令和４年１２月から自治会長が民生委員も兼ねることになりました。
自治会長推薦のため、適任者を当たってみましたが、仕事の重さから、どなたも引き受けてくださる方がおられませんでした。
引き受けた民生委員の活動の中で気づくことがありました。

例えば、民生委員を引き受けて、独居老人宅へ訪問した際のこと。
「自治会長さんへ要望がある。溝に蓋を設置してほしい。」
要望された方は会員ではありません。会員ではないものの、要望はされます。
この方は「以前、会員だったけど、もうやめた。」とのこと。
民生委員として、要望はお聴きする。自治会長の立場ではどうなのか？
民生委員の対象となる人に自治会の会員で「ある」「ない」は関係ない。
自治会長は会員だけの要望を聞けばよいのか？何かおかしい。

⑤条例施行とコミュニティ協議会の設立
折しも、市では、１月から長岡京市助け合いとつながりのまちづくり条例が施行されました。また、六小校区では４月末から校区の全住民を対象とした地域コミュニティ協議会の活動が始まりました。
六小コミュニティの設立総会の際、住民からこんな質問がありました。
「入りたくない人はどうなのか？」
コミュニティの役員は、全ての住民が対象で、会員で「ある」「なし」はないと説明されました。
市も地域コミュニティ協議会も、会員で「ある」「なし」はなく、地域全員に向けたサービスを行っている。
なぜ、自治会や子ども会が会員を必要としているのか？
会員制度を撤廃すれば分断がなくなる。
会費がなくなれば、なくなった分でサービスを実施すればよく、改革がうまくいかなければ解散も視野に、役員会で話し合い、強い気持ちで、改革にあた

ることになりました。

⑥総会で提案

総会では、従来の自治会員に向けた活動（ジチカツ＝自治会活動）から、地域全員に向けた活動（シン・ジチカツ＝自治活動）へ大きく活動方針を改めることにし、会則を改正。総会は書面開催。全世帯に改正の思いを記載した総会冊子を配布して意見を伺いました。反対する意見はありませんでした。

行動科学の知見に見る「自分だけ損をしたくない」「社会規範に従う」というバイアスなのでしょうか。または、単なる無関心なのか、不安です。

総会を経て、返礼品を用意し、全世帯にジチカツ協力金の提供をお願いしました。

原則持参でお願いし、銀行口座への振込も出来るようにしました。会費でないため、会員の支払いの有無を集約する作業がなくなり、何より役員が会費の徴収に回るストレスを排除できました。

正直不安でした。持ってきてくださる人がいなかったらどうしようと思いました。

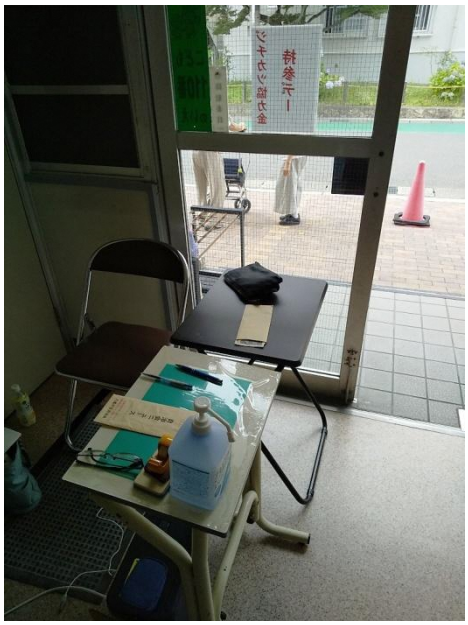
仮に収入がゼロとなっても活動できるのか？

費用の掛からない活動。例えば、地域の共通の課題を協議し方針を決めたり、みどりのサポーター活動、防犯パトロールなどは最低でも継続することができそうです。

民生委員の活動は無報酬です。収入が無くても必要なジチカツはある。

自治会運営補助金や古紙等集団回収活動助成金、社協からの助成金など、一定の活動により、収入を見込めるものもある。収入を把握して支出を決めるという原則にしたがって、活動すればよい。役員と改革にあたる決意をしました。

⑦ジチカツ持参デーでの気づき



6 月 25 日に管理事務所で半日だけ、ジチカツ持参デーを開催しました。

結果、３４人がお越しになられました。

ゼロかも？と思っていたため、予想より多く驚きました。

「少なくてごめん」「引っ越して来ました。よろしくお願いします。」など、声をかけていただきました。中には、今まで頑なに会員とならないと宣言されていた世帯が持参されました。

返礼品をお渡しすると感謝の言葉をいただく。

これもコミュニケーションなんだと気づきました。

特に印象に残ったエピソードは、「持参デーは、来年も実施してほしい」という要望です。その方は「出かける用事（仕事）が出来てうれしいから」とその理由を述べられました。

お金を支払うことで社会に貢献できる。
「何日も前からカレンダーに持参デーの日を記載し、袋を用意する。準備から仕事。振込でなく、持参すれば会話ができる。１日仕事で、私は達成感が味わえる。」
持参デーが仕事になっていました。感動を覚えました。

そういえば、今年の春、少年補導委員の公募を行ってみました。
地域のために手を挙げる公共心のある方はないと思い込んでいたところ、高齢者の方から申し出があり、勇気をいただくことができました。
役員も持ち回りでなく、公募で選任することが本来の姿であると認識することができました。する仕事が必要なのだと気づきました。

⑧紙回覧をブログに代えようとして気づいたこと

昨年の１２月からジチカツ掲示板として紙回覧をウェブサイトに代えられないか、試験的に併用しています。
紙回覧は全世帯へ回覧しています。前回、紙回覧が要不要の意向調査を行いました。
その結果、紙回覧を希望する方がかなり多くありました。
当初の予定では、紙回覧を不要する方が多くなると想定していたので意外でした。
一方、紙回覧が戻って来る時間が短くなったように感じました。
おそらく、回覧の内容はウェブサイトでいつでも閲覧することが可能となり、紙回覧が廻って来ることで回覧があることを知るきっかけになったのでしょう。

３．今後の課題

役員から取り組みの啓発の意味も含め、再度、ジチカツ協力金の依頼を実施してはどうか？と提案がありました。実施に向け準備を進めたいと考えています。
他に、取り組みを広めるため、ホームページの開設を予定しています。
ホームページは、ボランティアのジチカツ協力員に制作を依頼しています。
直面する課題は、来年度の役員の選出方法です。
従来は、班ごとに、会員の中から順番に選出されてきました。
今後は、全員を会員と見なすため、役員の選出方法が変わります。公募制など、今後、その対応を決めていく必要があります。

取り組みを始めて、半年を経過していませんが、いろんなことを気づかされました。
地域には、静かで大切な協力者がいるのです。
心強い公共心のある協力者を見逃さない、又は発掘する機会を設け、地域づくりに活かし、一人ひとりが地域で幸せになってほしいと活動を続けられればと思っています。
今後、取り組みが定着するまで、地域の方と一緒に、継続して実施していきたい。

以上